

建築は平等で残酷、しかし信頼できる世界

永井 拓生

環境建築デザイン学科

1. はじめに

2011年は特に多くの自然災害による被害が報じられた1年でした。東日本大震災によって東北は甚大な被害を受け、私の身近な友人にも、直接被害を受け方々が多くおられます。現地の被災者の方々が一刻も早くもとの生活へ復興されることをお祈りするとともに、心よりお見舞いを申し上げます。

2. 構造設計とは

私の専門は建築の構造設計で、これまで大学での研究と並行して自営で設計事務所をやってきました。構造設計は建築のなかでもとくに理系色の強い分野であり、したがって数学や物理が大嫌いという学生には、ちょっと向かないかもしれません。しかも面白いかどうかといえば、仕事はほとんどが製図や書類作成の雑務で、毎日がキツイです。おまけにいつも締め切りに追われていて、提出前は徹夜も多く、心が休まることはほとんどありません。一番大変なのはコストのコントロールで、これはとにかく胃が痛くなります。もっとも、こういうことは建築家もまったく同じなのですが・・・。

数学や物理が必要となれば、この仕事がそれほど昔からあるものではないということが分かるかと思えます。大抵の人は建築というのは古くからあるものと思っていますが、今の建築は近代以前のそれとは別物で、産業革命から生まれた機械や電気と同じように、全く新しいものと考えたほうがよいと思えます。特に、材料の変化が新しい考え方をもたらしました。構造設計は、この新しい建築を支えるために生み出された職能と言えます。

構造設計という職能の初源は材料の節約にあります。たとえば1920～30年代にスイスは経済危機に陥りますが、そこで登場するのがロベール・マイヤールという構造家です。マイヤールは高価な鉄骨でなく、鉄の使用量を抑えた鉄筋コンクリートを使い、さらに材料を節約するため非常に薄い板のようなコンクリートで長大スパンの橋を作り出します。コンクリートをペラペラに薄く使おうとすると、ちょっとした構造計算の能力が必要となります。マイヤールはこの点で、時代を先んじていました。構造設計者という職能は、経済的な背景と構造力学の進歩が融合したところに生まれたわけです。

材料の浪費を制御し、生産エネルギーの省力化を

科学的な計算によって実現する構造設計という職能は、ある意味では実に「環境に優しい」職業であると言えます。

3. 建築設計は平等で残酷

私は構造設計を生業としてきましたが、設計会社や事務所に勤めた経験がなく、また常にアドバイスを求められる先輩もいないので、新しい仕事が始まるたびに法令や設計規準、指針を独り勉強し、設計の手法は参考書や雑誌の作品解説を読むなどして学んできました。専門業者との打ち合わせでは聞いたことのない用語に苦しまされるのが日常であり、この点において、私は学生の皆さんと何ら変わらない立場でいつも建築に相対せざるを得ません。

建築設計はこれまでに進歩してきた技術の結晶です。多くの専門家の技術の研鑽が、今日の建築を支えているのは事実です。しかし一般には、技術も知識もデザインのテクニックも全てを持った人がいて、新しい建築が生み出されてきたというわけでは、実はそうではないと思っています。フランスのデュマルセという学者はカンボジアの世界遺産アンコール寺院遺跡の修復にも携わっている人で、建築に対する見識を以下のように書いています。

・・・ Architecture is defined as the art of construction. Yet, this definition ignores one aspect of this art: the anticipation of the finished work.

・・・ (中略)・・・ The project expresses the desires of the master builder in the limits of his economic possibilities and technical knowledge at the moment.・・・

ここには、建築を行うということの初源が、誰にとっても平等であるということが示されていると思えます。

アンコール・ワットに近接するバイヨン寺院は巨大な石積みの構築物で、ワットよりも遥かに巨大です。しかし技術の水準や計画の完成度は、遥かに劣ると言わざるを得ません。現在は構造的な欠陥や倒壊の危険性が懸念されていますが、これは先行したワットに対して未熟な知識や技術で無理に競ったことが荒廃の要因です。バイヨンの崩れかかった石積みと対峙したとき、希望に満ちたフレッシュな新参加者が、既に完成された様式や権力を打ち破っていこうとする、焦りすら感じさせるような気持ちを想像

できます。彼らにとって全く未知の規模・計画あるいは技術に挑戦をしたわけで、おそらく入学したての学生が、何の知識も準備も無く建築という領域に入っていく気持ち・立場と全く同じではなかったかと思えます。

しかし、建築はあくまで誰かに任されて作るものです。ですから野心的な挑戦者も、普通の職人と変わらず社会の要請にきちんと応える責任を負わされます。私の好きな建築家は、バイオンを作り上げた無名の棟梁や、鎌倉時代に未曾有の大空間を立ち上げた重源、仮柱無しにパンテオンに匹敵するドーム工法を作り上げたブルネレスキといった人たちですが、彼らは他の誰かより優遇されていたわけでは全くありません。むしろ挑戦者である代わりに普通以上の責任を負わされています。そういった人々の仕事を思うと、チャレンジする勇気が湧いてきます。自分も新しいことをしたいというとき、彼らの気持ちを何となく引き継いだ気分になる、まあ大抵はただの妄想に終わりますが・・・しかしこれが、設計の面白いところの1つです。

東日本大震災が起きた矢先に滋賀県立大学に来る好運を頂いて、同時に被災地の復興に何か役に立てるようにがんばりたい、という思いでいます。同じ季節に入学した学生の皆さんも、きっと同じような気持ちではないでしょうか。震災の被害があまりに大きく、自分に何もできないのではないかと無力を感じることもあるかと思えます。しかしそうではなく、手に持つ限りの知識やアイデアのなかで、どこまでやれるのかと向き合う事こそが重要で、そのことに社会人も学生も関係ありません。初めから諦めることだけはしたくないものです。

4. 竹の会所

昨年、環境建築デザイン学科の陶器浩一先生と本学をはじめとした全国の学生有志、気仙沼の高橋工業、さらに多くの地元の方々とともに、気仙沼大谷海岸に「竹の会所」を作り上げました。延べ5週間に亘るテント生活はもちろん、竹を使ったかなり規模の大きい空間構造を作るため、材料や道具、食料や運搬といった兵站すら全て自分たちで行わねばなりませんでした。竹を使った建築に前例がほとんどないとは言え、我々は玩具を作るわけでもアートを作るわけでもないのですから、集会所としてきちんと使えるものを作る必要があります。ワークショップの前は連日連夜の打ち合せです。あまりの打ち合わせの多さに、本当に脳味噌が疲れ果てるのを感じました。仕事を大きく分けると、設計・施工図の作成、構造の実験と分析、モックアップ作成、ワーク

ショップ準備という4つがあり、学生がそれぞれ班長を決めて自分たちの仕事を責任持って進めていくという方式です。追い込み時期になるにつれ、だんだんと責任感を自覚し、自ら仕事を作り作業を進めていく学生の成長力はもの凄いものがあります。それはワークショップ後半に、ある種の信頼にまで成長します。

現場で一番辛かったのはやはり風雨の中の作業です。竹の会所の建設中、数回にわたって台風や悪天候に見舞われましたが、寒さと雨は本当に我々の気力と体力を奪います。夏の猛暑では照りつける日差しが憎い限りでしたが、雨に比べればよほど有難いと思ったものです。竣工式の間際、雨の中で昼食をどうするか、作業を続けるべきか、などと色々考えていると、地元の方が現場にいる全員を御宅に招待してくれ、暖かい食事を御馳走してくれたのです。身も心も休まり、これは本当に有難いことでした。

私が最も印象に残っていることは、地元の方が、竹の会所は完成しなくて構わなかった、と言われたことです。私たちは完成の喜びに狂喜乱舞でしたが、一方で地元の方はちょっと違う思いで竹の会所の現場を見守っておられたようです。風雨のなか働く学生の真剣な姿勢に、地元の方々がかまってやりたいという気になってくれたのかもしれませんが。多くの方々が登場に遊びに来てくれるようになり、たくさんの方々の差し入れや、作業のアドバイスをくれる人もいます。立ち上がる空間に子ども達が感嘆の声を発したとき、本当に嬉しい気分でした。地元の方々は震災の後、そうした人同士の触れ合いや交流を持てずにいたわけで、そういった機会をもたらずきっかけとなったのは明らかに学生の真摯な労働に対する信頼であり、竹の会所という仕事の本当の価値だったかもしれないと、今は思っています。

5. 津波の記憶

三陸に平磯虎舞という江戸時代より続く伝統の舞があります。竹の会所の竣工の日、地元の子も達が出来上がったばかりの竹の会所で披露してくれました。これは漁の安全を祈願した行事だといえます。私は以前にも虎舞の練習を見せてもらっていて、虎舞の笛の音をはじめて聞いたとき、何とも言えない哀愁があるなと思ったものです。宮沢賢治は東北で生活を送ったわけですが、私が震災をきっかけに三陸を訪れるようになって、賢治の小説が持つある種の哀しさのようなものに、三陸の津波の歴史を下敷きとしたイメージがあるのではないかと感じるようになりました。海と自然の恵みへの感謝とともに度重なる津波の記憶が、笛の音や人々の作り出すイ

メージの根源にあるという気がしています。

災害の記憶を人間は年月とともに失っていきがちですが、こういうところに地域の伝統を伝える意味があり、それを味わう意味も生まれてきます。竹の会所は4年間の短命な建築ですが、そういう記憶を伝えていく場として、ゆくゆくは滋賀県と全国の学生の奮闘の記憶も交じり合い、地元子ども達が新たな物語を生んでいく場となっていけば、これは建築の最大の幸せと思います。

ところで、竹の会所のデザインには実は色々と仕掛けが仕込んであります。これは学生には今は分からない事だと思います。どこがそうとは言いませんが、学生の皆さんが就職されて設計の経験を積み、デザインを本格的に始められたころには、おそらく気付かれるかもしれない、それも楽しみです。